

【その二世帯住宅計画にちょっと待った その1】

世に言われる団塊の世代(昭和22年~24年とその前後)の年齢はおおよそ70~73歳になります。まさに高齢者のど真ん中です。その数は全国に1,000万人以上といわれています。これらの多くの人々は、地方出身者であり東京・大阪・名古屋等の大都市圏で職を得て、結婚しマイホームを買いました。今から35年~40年前のことです。子供の数は平均して2人程度です。子供が独立し(していない家庭もあるが)、夫婦二人の老後を安穩と過ごすことが最後の望みかもしれません。しかし、多くの家庭の悩みは、35~40年前に購入した住宅はさすがにその古さからリフォームの必要性が出てきます。現在とは違い、浴室や台所の水回り、バリアフリー等の設備がまるで違います。

Aさん(70歳)は都内の住宅地から日本橋の会社まで、約1時間かけて通勤する真面目一筋なサラリーマンでした。30歳で結婚し、二人の子供を大学まで出しました。まさに絵に描いたような成功したサラリーマンの典型例です。都内住宅地に200㎡の土地に床面積110㎡の一戸建てに住んでいます。昭和55年建築なので凡そ40年になります。妻は67歳、すこぶる元気で水泳教室と華道教室で人生を謳歌しているといっても過言ではありません。

65歳には役職定年となりいったん退職しましたが、社長の信任が厚く顧問で残りました。しかし、70歳になったのをきっかけに48年間務めた会社を完全に退職しました。

勤めた会社は上場会社で、かつ役員まで務めたので退職金や株式など手元に1億円ほどあります。自宅のローンも終わり、身体にも不調はなく、年金も月額25万円ほどあり、株式配当や運用益を合わせると年間500万円程度の収入があります。贅沢さえしなければ悠々自適な生活を送ることが出来ます。すべての人がそうであるように、この間様々なことがありましたが、むしろ辛いことや悲しいことが過ぎてみれば良い思い出に転化します(何故か良い思い出はそれほど記憶には残りません。つまり、良い思い出というのは「慣れ」が生じて新たな刺激的な良いことがないと忘れ去られるのでしょうか)。

長女(38歳)が5年前に結婚し二人の孫(2歳と4歳)にも恵まれました。長女の夫(40歳)も都内の会社に勤めるサラリーマンです。実家から車で20分ほど離れた場所で、2DK(約50㎡)の賃貸マンション(家賃16万円)に住んでいます。次女は35歳独身で大手外資系の金融機関勤務、独立心旺盛で都心のワンルームマンション(家賃9万円)を借りて一人住まいです。

そんな折に長女から母親に相談が持ちかけられました。「どうしたの、何かあったの?」と母親は不安げに、何か心配事があるのかを尋ねました。長女は神妙な面持ちで「子供も大きくなってきて今住んでいる賃貸マンションでは狭くなってきたから、もう少し広い部屋が欲しい」とのことでした。

とはいっても購入するには都心部に近い分譲マンションは70㎡でも8,000万円を優に超えます。3年前まではダブルインカムで自分にも収入があったので、頭金2,000万円程度は用意できるものの、すでに退職して子育てに専念しており、年収900万円の夫の給与だけでは6,000万円のローンを抱える勇気はありません。かといって現在の年収で購入可能な勤務先から遠い場所に移るつもりもないといえます。父親に頭金の援助を頼むことも考えましたが、妹に「お姉ちゃんだけもらうのはおかしい!」といわれ兼ねず、ましてや父親が援助を承諾してくれる保証はありません。

そこで思いついた妙案が「両親と二世帯住宅にして一緒に住んだらどうかしら。それなら妹も仕方がないと諦めてくれるかもしれない」です。

「それでね、パパ、ママ、今の家は狭くなったので引っ越したいと思っているのだけど、この際一緒に住まないかなと思って。パパも完全にリタイアしたし時間があるでしょ。孫の世話も楽しいかなと思って。主人にね、この計画を話したらお前の好きなようにしていいよといってくれたし」

長女の一方的な意見であるにも関わらず、母親としてはそれほど悪い気はしませんでした。本来であれば子供たちが巣立ち、これからは夫婦二人で余生を楽しむべくグッドタイムを過ごすのが理想だと思います。金銭的にも余裕が出来て、旅行や趣味に時間を割くことが出来る至福の時代が訪れるはずですが。特に女性は90歳前後まで、男性も80歳程度までは健康に過ごすことが出来る時代です。ただ、認知症が一番の敵となるのかもしれませんが、これとて認知症に効くというサプリ等が開発されています。

さてどうしたものかと、母親の美紀は悩むことになったのであります。

次回に続きます!
お楽しみに!

